

伝笑鳩例会<幸 裕 (=交友) 録>(頓珍漢な会話)

1. 「夫婦で読める、食卓やベッドサイドの必需品」

「妻のトリセツ」「夫のトリセツ」を著した黒川伊保子さんが送る『昭和の<家庭の医学>みたいな、バイブルみたいな本⇒「夫婦のトリセツ」<決定版>の一部をご紹介します!!

(裕) 女性ちゅうか奥さんは何で質問にちゃんと答えへんのやろな。例を言うて見るで。

『(夫)今年、お母さんの七回忌だね。いつにしようか

(妻)そう言えばお父さんの七回忌のとき〇〇のお婆さまが、茶わん蒸し冷めてたって言ってたでしょ。あそこの仕出し料理、使えないよねえ。

(夫)5月の2週目はどう?⇒**そうだったなあ。新しいお店を見つける?**

(妻)**となると、日程がその店の空き状況にも左右されるから、まずお店を検索しない?**

(妻)あ、そう言えば喪服入るかなあ。最近太ったし』

(夫)そうかなあ

(妻)**夏の喪服なら余裕があるから、5月の末か6月がいいな』**

(幸)『「いつ?」と聞いたら日付が返ってくると信じて、数字の認知モードに入っている夫の脳は、それ以外の答えを繰り出す妻に戸惑い、2歩も3歩も先に行っている妻は、話について来れない夫にイラつく。』ちゅうことかいな

(裕)これが度重なったら、夫が妻を「とっ散らかってる。論理的じゃない。」と思い込み、妻が夫を「頭の回転が悪い朴念仁」と思い込むことになるんやで。もちろんどちらも濡れ衣やねんけどな。対話方式が違うってほんま恐ろしい言うこっちゃ。

(幸)わしらもう仏さんやけど、お前はまだ現役やさかい、気いつけなあかんで。嫁ハンに話の「トリ」(=最後)まできちんと説(セツ)明しなはれ。

(裕)これがホンマの「トリセツ」や。

2. 「対話の極意」

(裕)ところでこの世の対話方式には「共感型」と「問題解決型」の2種類があんねんて。

例えば「いろいろあって、もうやってられない。今日は早く帰る」そんな時、心を癒されたい人と身体を休めたい人がいる。勿論どちらも得たいが脳には優先順位があって人それぞれ違うねんて。心を優先する人は「共感型」、身体を優先する人は「問題解決型」。

(幸)対話の極意は何やねん?

(裕)「自分の話は結論から言い、相手の話は共感で受ける。」つまり自分の話は「問題解決型」で、他人の話は「共感型」で進めるちゅうことや。実のところ人間には逆の傾向があるさかい、この極意をマスターしている人はとても秀でて見えんねんて。

(幸)「ごくい」っぱん的な結論やんけ。

以 上

(大鳥羽 裕太郎)